

## 看護師養成のための学士教育課程における 地域看護実習プログラムの評価

# Evaluation of “Community Health Nursing Practice Program” in Baccalaureate Nursing Education

安藤 智子・岩瀬 靖子

Tomoko ANDO and Seiko IWASE

少子高齢化の進展を背景に、地域包括ケアシステムの構築が求められており、看護師に求められる地域看護能力も変化している。本学の公衆衛生看護学実習Ⅰのプログラムは、看護師教育課程の学生を対象に地域看護能力を付与することを目的に考案し、平成28年度に初めて86名の学生が実習Ⅰを履修した。プログラムの成果と課題を明らかにすることを目的に、学生の実習記録、関係者のアンケートをデータとして分析した。その結果、学生は「保健医療福祉システムにおける看護職及び他職種の役割や機能を説明できる」等の実習目標を達成していることが明らかになった。家庭訪問・地区踏査実習は、地域住民には「地域や健康を振り返る機会になった」、自治体保健師には「住民の新たな側面に対する気づき」が得られるなど、地域の関係者にも良い成果をもたらしていた。課題は、継続的な交流を希望している地域への関わり方を検討すること、実習Ⅰで学生が把握した地域の健康問題をそのままにせず、地区担当保健師や地域関係者とともに解決に取り組めるよう、保健師教育課程の実習Ⅲの内容を検討することである。

### 1. はじめに

高齢者人口の増加による要介護者対策として、高齢者支援分野では平成18年より地域包括ケアシステムの構築が進められてきた。がん治療や終末期医療でも入院治療から外来治療・訪問診療にシフトしており、子育て支援も含め、あらゆる領域で地域包括ケアシステムによる対応が重要とされている。

看護学教育においても地域ケアの視点を付与し、強化することが喫緊の課題であり、特に基礎教育において地域ケアの概念や方法論を教授することが求められている<sup>1)</sup>。しかし、近年新設される看護系大学の教育課程をみると、保健師教育課程が選択制であったり、看護師教育のみの大学も増えており<sup>2)</sup>、これらの変化を背景に、現在2011(平成23)年に策定された「学士課程においてコアとなる

看護実践能力と卒業時到達目標<sup>3)</sup>の見直しが行われている。

本学は2014(平成26)年4月に看護学部が設置され、現在の4年生が初めて卒業する年度を迎えたところである。1学年の学生定員は80名で保健師教育課程は3年次から20名の選択制であるが、公衆衛生看護学教育は、表1のとおり看護師教育課程における地域看護教育を含めて構成されている。看護師教育課程の必修科目は、公衆衛生看護学概論Ⅰと公衆衛生看護学実習Ⅰ(以下「実習Ⅰ」と称す)のみであるが、実習Ⅰに必要な知識と技術を学ぶため、公衆衛生看護方法論Ⅰと公衆衛生看護技術演習Ⅰの履修を全員に課している。これら4つの科目により地域ケアの視点と技術を持つ看護師の育成を図ることを意図している。

学士課程における看護師教育課程の地域看護実習プログラムに関する文献を探したが、保健師と看護師の統合教育課程における地域診断実習がほとんどであった。そこで、実習目的にあった実習施設の種類や実習内容を検討し、実習プログラムを考案したので、実習プログラムを評価したいと考えた。

連絡先：安藤智子 toando@cis.ac.jp

千葉科学大学看護学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Nursing,  
Chiba Institute of Science

(2017年10月2日受付, 2017年12月26日受理)

## 2. 目的

本研究の目的は、実習Ⅰのプログラムの成果と課題を明らかにし、看護師養成のための学士教育課程における地域看護実習プログラムの改善に資することである。

## 3. 研究方法

### 3. 1 分析対象

- ①実習準備を含めた実習プロセスの記述
- ②平成28年度に実習Ⅰを履修した3年生86名の実習プログラムごとの学びの内容が記された実習記録
- ③実習に協力した住民43世帯に対し実習後に実施した、実習に対する意見・感想に関するアンケート結果
- ④実習地区の町内会長13名及び協力施設4か所に対し、実習後に実施した実習に対する意見・感想に関するアンケート結果
- ⑤A市の保健師2名(a地区担当保健師、上司保健師)に実施したインタビューデータ
- ⑥実習施設である居宅介護支援事業所19か所に対し、実習後に実施した実習に対する意見・感想に関するアンケート結果

### 3. 2 分析方法

実習記録については、実習プログラムごとに提出された実習記録書の「実習で学んだこと」の記述を取り出し、内容を要約して、性質の似たものをまとめて命名した。アンケートについては、単純集計を行った。インタビューデータは逐語録を作成し、意味のあるまとまりで取り出したコードを要約し、カテゴリ化して命名した。カテゴリ化においては、公衆衛生看護学が専門で、質的研究の経験のある教員と一緒に作業を行い、合意を得た。

### 3. 3 倫理的配慮

実習を終了し実習記録を提出し成績が確定した後には研究を開始した。学生に、研究目的及び方法、学生氏名は匿名で扱うこと、協力しないことによる成績への影響などの不利益はないことを文書と口頭で説明し同意書を得た。住民、町内会長、協力施設に対しては文書で説明し、返信をもって同意とみなした。保健師には文書と口頭で説明し、同意書を得た。千葉科学大学倫理審査委員会の承認を得た。(承認番号No28-18)

### 3. 4 実習Ⅰの概要

実習目的は、公衆衛生看護を展開する知識や技術について実践をとおして深めるとともに、地域ケアシステムにおける看護職としての役割、看護の特質を追究することである。実習目標及びプログラムは、表2のとおりである。実習直後の演習Ⅰの時間に、お互いの学びを共有するためのグループワークを行った。居宅介護支援事業所と病院については、実習していない学生が理解できるようグループ編成を行った。

実習プログラムの検討及び実習施設の選定において考慮した点は以下のとおりである。病院の医療連携室・医療相談室実習を取り入れた理由は、医療機関と地域をつなぐ組織として近年その重要性が高まっている部門であり、そこで働く専門職からみた病棟看護職との連携を学んでほしいと考えたからである。

居宅介護支援事業所実習は、地域で療養する要介護者を支える介護支援専門員の役割と連携技術を学び、ケアチームの一員である看護職の役割を考えることができると考えたからである。

また、一般家庭訪問実習(以下「訪問実習」と称す)は、学生2名で地域の健康な住民の家庭を訪問し、住民の健

表1 本校における公衆衛生看護学教育体系

授業科目名	単位	必修	履修規程上の必修科目◎、看護師課程学生全員に履修を勧める科目○			内容等
			2年次 秋	3年次 春	4年次 秋	
公衆衛生看護学概論Ⅰ	1	◎	8			公衆衛生看護の理念・対象・方法
公衆衛生看護学概論Ⅱ	2		15			養護概説
公衆衛生看護学方法論Ⅰ	2	○	15			訪問・相談・教育方法論
公衆衛生看護学方法論Ⅱ	2			15		地区診断・地区活動論
公衆衛生看護学方法論Ⅲ	2			15		領域別保健活動等
公衆衛生看護学方法論Ⅳ	2			15		学校保健活動論
公衆衛生看護学技術演習Ⅰ	2	○		30		訪問・相談・教育技術
公衆衛生看護学技術演習Ⅱ	2			30		地区診断・地区活動技術
公衆衛生看護学実習Ⅰ	1	◎		23		市町村・病院・居宅介護支援事業所・家庭訪問・地区踏査
公衆衛生看護学実習Ⅱ	2				45	保健所・産業・学校
公衆衛生看護学実習Ⅲ	2				45	市町村

※数字は授業回数

康に対する考え方と健康対処行動を聞いてくること、周辺地域を歩いたり地域にある社会施設を訪問し、住民の健康生活を支える視点から地域の特徴を考える「地区踏査」を行なうこととした。このプログラムの意図は、住民のもつセルフケア能力を学ぶことと、生活環境による健康への影響を実際に見て考えるためである。学生は、本実習後に本格的に病気や障がいを持つ患者を対象とする病院での実習に臨むため、この実習での体験は、患者理解において患者の持つ力や生活背景を含めた理解につながるようになることと考えた。

社会施設は、地区内の住民が利用する老人福祉センターと民間鉄道会社の駅、個人が運営している地域の歴史文化に関する資料を展示している資料館、公営の養護老人ホームの4か所を選定し、実習協力を依頼した。協力内容は、学生10人程度のグループに対し、施設の目的や利用者の現状等について説明を行う事である。また、当該地区は漁師町でもあるため、漁協地区支部事務所職員に漁師の生活や健康の話を知りたいと相談したところ、漁師との懇談会を設定してくれた。この懇談会にはa地区担当保健師も同行することにした。

実習地区の選定と運営については、地域と共生する大学づくりという本学の目標にあわせ、大学が設置されている地区の町内会と管轄する自治体に協力を依頼した。その意図は、地域と大学が持つ力を提供し合うパートナーシップの関係のもと、実習が双方の役に立つことを目指したからである。

#### 4. 結果

##### 4. 1 訪問実習の結果

###### 4. 1. 1 地区組織・自治体との協働

家庭訪問対象者の選定にあたり、a地区の町内会長が集まる会議に参加して実習目的を説明し、実習対象者43世帯の推薦を依頼した。13町内会全員から協力の申

し出があり、1町内4～5世帯で分担することになった。町内会長自身の家庭への訪問も承諾していただけたが、推薦された家庭訪問世帯数が不足したため地区の民生委員・児童委員協議会に相談し、民生委員6名・主任児童委員1名の協力を得ることができた。地区担当の保健推進員8名は仕事をしている家庭が多かったため、訪問の協力依頼は行わなかった。

また町内会所有の青年館を、訪問・地区踏査の拠点として4日間借りることも了承された。町内会長から推薦があった家庭には、教員が事前に訪問し、文書で訪問目的や内容、個人情報の保護に関する説明を行い、家庭訪問同意書を受領した。

実習期間中は、被訪問世帯の情報の共有、事後管理が必要な事例の検討等を行なうため、a地区担当保健師または上司の保健師に午後3時から青年館でのカンファレンスに同席していただくことを依頼した。また、学生が家庭訪問で得た住民の健康対処行動等の情報は、後日まとめて地区担当保健師に提供することとした。

###### 4. 1. 2 訪問・地区踏査の準備学習

学生は実習初日の学内実習日に、訪問目的、訪問内容を含む「家庭訪問計画」の立案を行ない、教員による指導と家庭訪問場面を想定し学生同士でロールプレイを行なった。

学生に住宅地区と訪問者の情報(氏名・住所・インタホンの有無など)を渡し、青年館から訪問先までの順路と時間を考えさせた。また、学生自身に訪問日と時間の確認の事前電話をかけさせた。

###### 4. 1. 3 家庭訪問の実際と結果

学生2人1組で訪問し、1時間程度、住民より「健康や病気に対する考え」や「日頃の生活」「健康対処行動」を聞いた。訪問後は把握した情報を学生カンファレンスで

表2 公衆衛生看護学実習Ⅰの概要

実習目標	①実習地における健康福祉ニーズを把握し、説明できる。 ②地域で生活している人々が、どのように健康や病気を捉え、対処しているのか説明できる。 ③実習地における保健福祉活動の目的と概要を説明できる。 ④保健福祉活動において活用されている社会資源の種類と利用上の課題を把握し、説明できる。 ⑤地域の人々に対する保健福祉事業に参加し、公衆衛生看護活動方法を説明できる。 ⑥保健医療福祉システムにおける看護職及び他職種の役割や機能を説明できる。
実習学生	3年生全員 86名
指導教員	4名(常勤2、非常勤2)
実習期間	7月第3週 5日間
実習施設	市町村実習(8市町)、居宅介護支援事業所(19か所)、病院医療連携室・医療相談室(14か所)
実習プログラム	全員:学内実習1日、A市内a地区一般家庭訪問・地区踏査実習1日、市町村実習1～2日 市町村実習が2日間の学生:居宅介護支援事業所と病院を各1日間実習する 市町村実習が1日間の学生:居宅介護支援事業所または病院のどちらかを1日間実習する

共有し、「家庭訪問から把握した情報から考えた看護の役割」を実習記録にまとめた。教員1名が青年館に常駐し、学生指導や問題発生時の対応に当たった。

分析対象となった学生の記録は84名(実習学生の97.7%)で、学生の学びは実習レポートの記述内容から分析した。212コードあり、25のサブカテゴリが抽出され8カテゴリに集約された。サブカテゴリをく、カテゴリを【】で示す。学生は、住民が〈自分なりに学習し、考えを持ち行動している〉〈QOLが重要で、健康はその人の心が決める〉等の【住民の認識と行動】を把握し、〈健康意識が高く自己管理ができていいる〉人もいれば、〈健康意識は高いが、病気の理解が不十分〉〈サービスの理解が不十分〉〈健診の必要性を感じず受けていない〉等の【不適切な自己管理方法】という人がいること、〈将来の健康に対する不安がある〉等の【不安や困りごとの存在】に気づいていた。また、〈家庭訪問は住民の生活に密着した健康対処行動や地域の特色を把握できる〉〈生活環境や背景がわかる〉という【家庭訪問でわかる情報】から、地域には〈独居世帯が多く地域の交流も減少している〉等の【地域課題の存在】があることを学んでいた。(表3)

学びから考えた看護の役割は、117コードあった。20のサブカテゴリが抽出され、8カテゴリに集約された。〈対象者の生活歴、考え、行動の理解と尊重〉等の【対象理解と尊重】、〈できているところをほめる〉等の【行動継続のための承認と場の提供】、〈継続可能で適切な運動指導〉等の【セルフケア方法の指導】、【家族指導】、〈家庭訪問による実態把握〉等の【地域課題の把握】、〈住民

や大学生との交流の場の創設〉等の【課題解決の方策の提案】、【地域の健康支援】【PDCAによる質の向上】が必要であると考えていた。(表4)

実習後に被訪問43世帯に無記名アンケートを実施した。回収数は32件(回収率74.4%)であった。実習で困ったことは「ない」(90.6%)、実習でよかったことは「あり」(84.4%)で、自由記載は30件あった。主な内容は「学生との交流・対話を通して日頃感じている地域や健康のことを振り返る機会になった」(5件)、「学生の意欲・態度に好感が持てた。対話が楽しかった」(23件)等であった。よりよい実習に向けての意見には、「学生のコミュニケーション能力の向上が必要」「実習方法の工夫」があった。今後の実習協力については全員が「協力してもよい」と回答した。(表5)

訪問実習中に発生したトラブルは、自宅と職場の訪問先の間違い1件だった。

#### 4. 1. 4 地区踏査の実際と結果

地区踏査は、家庭訪問の対象世帯が居住する地区周辺の自然環境と生活環境を把握して、家庭訪問で把握した健康対処行動や健康課題との関連を考えることを目的とした。学生は、家庭訪問を半日、地区踏査を半日のスケジュールで行動した。地区踏査の中に社会施設1か所を訪問して話を聞いた。

学生が環境と健康の関連で考えた学びの内容を表6に示す。実習記録用紙は「歴史・文化」「自然環境」「社会環境」の3つの枠組みごとに健康との関連で考えたこと

表3 家庭訪問から学んだこと

カテゴリ	サブカテゴリ
住民の認識と行動	自分なりに学習し、考えを持ち行動している QOLが重要で、健康はその人の心が決める 自分の健康や健康法に自信を持っている
適切な自己管理の遂行	健康意識が高く適切な自己管理ができていいる
不適切な自己管理方法	健康意識は高いが、病気の理解が不十分 健康課題への対処行動が不適切 サービスの理解が不十分 運動の必要性は理解しても継続できない現状 運動時に汗をかくことを意識している 食事内容や飲酒量が不明 健康知識はもつが、本人・家族に適しているとは限らない 検診の必要性を感じず受けていない
不安や困りごとの存在	運動方法に対する不安がある 悩みや不安、困りごとがあっても表現していない場合がある 将来の健康に対する不安を持っている 表現されない本心がかる
将来ニーズの予測	将来必要と予測されるニーズがある
家族の影響	健康意識は家族の影響を受ける
家庭訪問でわかる情報	家庭訪問は住民の生活に密着した健康対処行動や地域の特色を把握できる 生活環境や背景がわかる
地域課題の存在	地域との交流が少なく社会的に孤立するリスクがある 独居世帯が多く地域の交流も減少している 大学生との交流希望を持っている 近所にスーパーがない 交通手段が少ない

を記述することを課した。歴史・文化に関しては53コードあり、【全国から移住し産業が発展して栄えていた歴史】【魚食の効果と保存食の高塩分】【漁師の生活の不規則さによる健康への悪影響】の3つのカテゴリに整理された。特に〈漁業が盛んで、醤油の町であることから塩分が濃い食文化が続いているのではないかと記述した学生が40人いた。

自然環境については、124コードあった。〈海に囲まれ気候が温暖で体調が崩れにくい、高齢者に住みやすい町〉と〈湿度が高くのどの渇きを感じにくいいため脱水症に注

意が必要〉等の【海に囲まれ温暖な気候によるメリット・デメリット】、〈住民は毎日坂を上り下りしているため足腰が丈夫で、便利な生活が体に良いとは限らないと考えた〉〈坂道が多く、石畳で凸凹していることから、高齢者では転倒のリスクが高い〉〈道が狭いため緊急車両が入りにくく、対応が遅れる可能性がある〉等の【坂が多く道が狭いことのメリット・デメリット】、〈地盤がしっかりしているため地震には強い〉〈海が近いため地震や津波があった場合に大きな被害が起こる可能性がある〉等の【地震・津波に対する強みと弱み】の3カテゴリに整理された。

表4 家庭訪問から学んだ看護の役割

カテゴリ	サブカテゴリ
対象理解と尊重	対象者の生活歴、考え、行動の理解と尊重 不安や困りごと、本心の傾聴 QOL向上支援
行動継続のための承認と場の提供	できているところをほめる できている自己管理の継続支援 相談や健康学習の場の創設
セルフケア方法の指導	健康課題の正しい理解と不十分なセルフケア行動の指導 継続可能で適切な運動指導 食事内容の確認や飲酒指導 薬の自己管理方法支援 根拠があり、本人に適した知識や将来必要となるサービス情報の提供 健診未受診者への受診勧奨
家族指導	家族も含めた指導
地域課題の把握	家庭訪問による実態把握 地域診断
課題解決の方策の提案	地域資源の情報提供 住民や大学生との交流の場の創設 買い物や外出に対する課題への対応
地域の健康支援	地域に浸透し地域の健康をサポートして住民から信頼される存在
PDCAによる質の向上	活動の評価と質の向上

表5 家庭訪問協力世帯アンケート結果

カテゴリ	記述要約(例)
学生との交流・対話を通して日頃感じている地域や健康のことを振り返る機会になった	・日頃から地元の交流を大切にしておられ、今回は学生さんと話し合う機会を得、このようなきっかけから健康・介護のみならず住みよい町づくりに繋がって行くことと思う ・退職後や老後の生活について、改めて考える良いきっかけになった。又、地域のことについても同様に感じた ・的を得た質問等で、これからのことについて良い勉強になった ・返答しながら、自身の生活を再確認できた ・高齢者ばかりで暮らしていると、心身ともに低下して行くことを強く感じる。若くて健康で、目的に向かい一生懸命勉強している学生に自分の日常を話し、気持ちが明るくなり、自分も日頃こうありたいと前向きになれた
学生の意欲・態度に好感が持てた、対話が楽しかった	・若い人たちが近い将来の看護に向けての意欲が感じられ、頼もしく思えた ・聞き方(相手をしっかり見つめていること)、話し方も素直で、この人たちは良い看護師さんになるだろう、明るい接し方に好感が持てた ・地元出身学生だったので、土地柄なども理解されやすかったと思うし、親しみを持てた(他20)
自分の話しが家庭訪問の目的に合致しているか疑問に思った	・一方的に一人でおしゃべりしていて、あれでよかったのかと感じる ・勝手におしゃべりしてしまい、実習の役にたてなかったのではないかと。もう少し知りたいことをはっきり言ってほしかった
学生のコミュニケーション能力の向上が必要	・さらっと物事を流さず聞くこと、関わった人に興味を持つことで話の幅も広がり、自分の知らない世界を知ることにつながる気がする ・もう少し突っ込んだ質問があっても良いかと思う
実習方法の工夫 実習の継続を希望する	・訪問に前に簡単な〇×式質問紙などを送っておけば、内容にも興味が増すのではないかと ・このような実習は続けたほうが良い

社会環境については74コードあった。〈道であった時に挨拶をしたり、家の玄関が開いており他者にオープンで住民がつながっている〉〈隣の家との距離が近く、生活音が漏れたり、気が休まらない環境である〉等の【住民の交流が盛んであることのメリット・デメリット】、【金

融機関はあるが、病院やスーパーがない】【公園が少ない】【交通手段は自動車利用が多い】〈少子高齢化により地域の行事ができなくなること、有事に助け合いができなくなること〉等の【少子高齢化による課題】の5カテゴリに整理された。

表6 地区踏査から考えた環境と健康問題の関連

カテゴリ	記述要約(例)
歴史・文化	<p>全国から移住し産業が発展して栄えていた歴史</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・土地の良さ、人々の努力により大きな都市になり、人々が訪れ、地域ならではの文化が発達</li> <li>・船で主に移動していたため、東北からの物資があったこと。食生活は栄養がとれていたのではない</li> <li>・昔から必要なものはすべてそろっており、しょうゆを作り人もいて食事は良いものだったと考える</li> <li>・歴史が古く、坂が多いため、石を積んだ上に家を建てるなど、昔の人の知恵が生かされている</li> </ul>
	<p>魚食の効果と保存食の高塩分</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新鮮な魚が捕れるので良いものを食べることができた</li> <li>・イワシやサンマ摂取はDHA・EPAが取れるが、塩分摂取が多いと、高血圧を引き起こす</li> <li>・<b>漁業が盛んで、しょうゆの町であることから塩分が濃い食文化が続いているのではないかと(40)</b></li> <li>・生活の一部に魚があり、食生活がワンパターン化して偏ると考えられる</li> </ul>
自然環境	<p>漁師の生活の不規則さによる健康への悪影響</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・漁業で命を落とすこともあったのではないかと考えた</li> <li>・漁師は生活が不規則で睡眠不足や生活習慣病になりやすい</li> <li>・漁師は食生活が不規則になり、間食が多いことから糖尿病になりやすい</li> <li>・漁業、農業が盛んであるために、朝起きる時間が早いことや、力仕事であるため腰痛持ちの人が多く考えた</li> <li>・漁師にはお酒を好む人が多い</li> <li>・漁師が多く魚を食べることは多いが、農家が少なく栄養の偏りが考えられる</li> </ul>
	<p>海に囲まれ温暖な気候によるメリット・デメリット</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>海に囲まれ、気候が温暖で体調が崩れにくいのではないかと。高齢者に住みやすい町(11)</b></li> <li>・海風があり、比較的過ごしやすいため、外出の機会が増えたと考えられる。散歩している高齢者を多く見かけた</li> <li>・海もあり、緑もあってとても自然豊かできれいなこと</li> <li>・涼しいため、熱中症、熱射病になるリスクが低いと考える</li> <li>・海が近く、塩害があるのではないかと</li> <li>・湿度が高く、のどの渇きを感じにくい、脱水症に注意が必要</li> <li>・湿度が高く、食物が腐りやすいため保存方法も考える必要がある</li> </ul>
社会環境	<p>坂が多く道が狭いことのメリット・デメリット</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・急な坂があるが、皆さん足が強く、杖をついても平気で坂を上り下りしている(3)</li> <li>・住民は毎日坂を上り下りしているために足腰が丈夫で、便利な生活が体に良いとは限らないと考えた(2)</li> <li>・地域の人は坂について「もう慣れたよ」と言っており、外では地域の人にすれ違うことが多く健康に意識が高いと感じた(4)</li> <li>・<b>坂道が多く、道幅が狭いため、足が悪いと歩きづらく引きこもる人もいるのではないかと(12)</b></li> <li>・<b>坂道が多く、石畳で凸凹していることから、高齢者では転倒のリスクが高い(55)</b></li> <li>・家の前に段差がある家庭が多く転倒・転落の危険がある</li> <li>・坂道が多く道が狭い、見通しが悪いため、歩行者が車の事故にあう可能性がある</li> <li>・坂道が多いので、足腰に負荷がかかり、強化されるが転倒の恐れもある。</li> <li>・<b>道が狭いため緊急車両が入りにくく、対応が遅れる可能性がある(16)</b></li> </ul>
	<p>地震・津波に対する強みと弱み</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・地盤がしっかりしているため、地震には強い(3)</li> <li>・海抜0メートルのところがあり、注意が必要</li> <li>・<b>海が近いので、地震や津波があった場合に大きな被害が起こる可能性がある(7)</b></li> <li>・地震による津波の被害がたびたび起きているが、坂道があり高齢者は避難ができない</li> </ul>
社会環境	<p>住民の交流が盛んであることのメリット・デメリット</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>道であった時に挨拶をしたり、家の玄関が開いており、他者にオープンで住民がつながっている(9)</b></li> <li>・地域内の交流が盛んで、何かあった時など情報共有や協力が得られる</li> <li>・ご近所同士が玄関前でトウモロコシやスイカを囲んで交流しており、気分転換につながる(3)</li> <li>・近所付き合いが多いため、独居になっても高齢者には住みやすい</li> <li>・困ったときに助け合う関係づくりはされているが、子どもが少なく次世代へ継承できない問題がある</li> <li>・住民同士のネットワークができていて、外部から転入者が孤立しないよう保健師が介入する必要がある</li> <li>・二世帯、三世帯で孫の面倒や親の介護をしている世帯が多い。自分の健康より家族の健康を優先する可能性がある</li> <li>・隣の家の距離が近く、生活音が漏れたり、気が休まらない環境である</li> <li>・隣同士が近く、防犯や高齢者の見守りという点は良いが、思春期の子供にはプライバシーの面で少々つらいかもしれない</li> <li>・地域の交流が多いため、外出できなくなると孤立感をより強く感じるのではないかと</li> <li>・家同士が近く近所の連絡が活発だが、若者離れ、高齢化が進み、介護不足、孤独死の増加、医療費の増加が考えられる</li> <li>・自分が生活しにくそうと感じても、「住めば都」、地域に住む方にとっては、落ち着いた良い町であることを知りました</li> </ul>
	<p>金融機関はあるが病院・スーパーがない</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・郵便局、銀行などは駅の近くに集まっていた。駄菓子屋や惣菜屋など小さな商店街がある</li> <li>・農家の人が野菜を売りに来たり、通販で食材を購入したりしている</li> <li>・<b>病院やスーパーがないことによる健康への影響や生活の不便さがある(26)</b></li> <li>・個人商店は近所の人が集まれるスペースにもなっており、会話を通して地域の状況把握ができるので連携していくことが大</li> </ul>
社会環境	<p>公園が少ない</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの遊び場が少なく、運動量が少ないのではないかと</li> <li>・公園、広場が少なく、日ごろ運動できる場が少ない</li> </ul>
	<p>交通手段は自動車利用が多い</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>車を使うことが多いので、運動不足になる(6)</b></li> <li>・住宅街が多く、近所同士の付き合いが多いことや、バスや電車があるが本数が少ないなどプラス面、マイナス面がある</li> <li>・電車の利用状況から、車のない人の利用が多く、駅まで歩くことは健康に良いと考えられる</li> <li>・1次産業が盛んであるが、高齢者が多く若者が出ていくことから後継者問題があると考えた</li> </ul>
社会環境	<p>少子高齢化による課題</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>少子高齢化により地域の行事ができなくなること、有事に助け合いができなくなること(6)</b></li> <li>・若者が減っており、高齢者同士が助け合わなくてはならない現状がある</li> <li>・高齢者の独居や夫婦世帯が多く、孤立化や老老介護の問題が出てくると考えられる</li> </ul>



図1 青年館でのカンファレンス、記録



図3 駅員から説明を聞く学生



図2 歴史資料館で説明を聞く学生



図4 地図を片手に町並みを歩く



図5 漁協で漁師さんを囲んで話を聞く

#### 4. 1. 5 地域関係者及び自治体保健師の実習に対する反応

町内会長、施設関係者に実習後アンケート調査を行った。回答数は、町内会長は4件(回収率30.7%)、施設関係者は3件(回収率75%)であった。

困ったことが「なかった」は6件、「あった」は1件であった。自由記載における具体的な記述内容は、「学生と会話ができる家庭の選択に悩んだ」であった。「良かったこと」は7件であり、町内会長の自由記載における記述内容では「若い世代の気持ちや考え方が聞けた」「自分の日常生活や健康の意識を再確認できた」等があり、施設関係者からは「施設の存在を学生に知ってもらえた、感謝したい」「実習の改善点や自由意見」の欄には、「地区の成り立ち、歴史・民話・自然学・漁業・農業・商業等一生懸命伝えている。これを機会にまたこの地区に来てみようと思ってもらえると幸いと思う」であった。「実習の改善点や自由意見」の欄には「学生がもっと日頃より地域住民とフランクな付き合いができる」とよい」「町内総会等で、健康について学生達の話聞ける機会を設けてはどうか」等の意見があった。(表7)

a地区担当保健師と上司の保健師に、学生の訪問実習記録に書かれた住民の健康対処行動・生活習慣と地域環境と健康との関連、住民が語った保健医療福祉への要望をまとめたレポートを報告したあとで、訪問実習に対する意見や感想を半構造面接により聴取した。レポート報告を行った理由は、実習で得た住民の情報を共有することを事前に約束していたことと、保健師が実習に対する意見を考える上で、参考になると思ったからである。聴取内容について類似性・相違性からカテゴリ化し分析を行った結果、30コードから12のカテゴリーが得られた。保健師は、〈学生時代や初任者の頃の視点を振り返るこ

とができた〉等の【自分の学生時代の振り返りができた】、【住民は保健師に話さない意識や思いを学生に話していることへの気づき】、〈保健指導時とは違い漁師がざっくばらんに話をしてくれ、内容も抱いていた印象と違っていた〉等【学生の聞き取り内容から住民の新たな側面に対する気づき】、【自分が健康な人の生活が見えていなかったことへの気づき】、〈普段車で行くので地区を歩かない〉等の【地区に行き、歩くことがなかったことへの気づき】を得ていた。そして【新しい考え方を取り入れ地区活動に取り組んでも良い】という考えを表明していた。

また、〈住民が学生には教えてあげようとしている〉ことから【学生に教えることが住民の自助、セルフケア力の向上につながっていることへの気づき】と【大学と市が連携することで学生の学びが深まる実習の意義】を感じ、【学生の力を借りて担当地区を見直し方針を考えるきっかけになると良い】、【他の地区でもとりくむ事で市全体のことがわかる】と考えていた。実習中のカンファレンスの参加については【学生の準備状況や個々の特性に対する理解を深める必要性】があり、〈緊急ケースにはすぐに対応できるので毎日のカンファレンスは、実習後のまとめの時でよい〉という【効果的な保健師の参加方法への改善点】を提案していた。(表8)

#### 4. 2 市町村実習の概要と結果

実習目的は、地域で生活する人々の健康レベルに応じた公衆衛生看護活動の実際を学ぶことである。自治体の規模、自治体ごとの実習人数、実習日程は多様であった。(表9)

実習の打ち合わせは、教員2名が自治体に出向いて受け入れ学生数、日程、プログラムを話し合い調整した。実習期間が短いため、見学できる事業は少なくとも、実

表7 町内会長・施設関係者の実習に対する意見

町内会長	・学生と対話ができる家庭の選択に悩んだ
	・学生の故郷のことなど話が聞け、積極的に質問があり有意義な時間を過ごすことができた
	・学生に話すことで自分の日常生活、健康意識を再確認できた
	・対応してくれた家庭から「学生(若者)と会話できて楽しい時でした」といわれたこと
	・我々の町に大学生が訪問してくれ、若い気持ちや考え方が聞けてよかった
	・学生がもっと日頃より地域住民とフランクな付き合いができるとうい
	・卒業後の目標などを話してもらえると良い
施設関係者	・町内会総会等で、健康について学生達の話聞ける機会を設けてはどうか
	・介護支援体制は整いつつあるが、支える若者世代の負担は増す。中高年の自主の精神を養うとともに、若い時からの健康づくり、介護予防に市を挙げて「健康なまちづくり」を目指し、大学の協力をお願いしたい
	・学生に施設のこを知ってもらえてよかった、感謝したい(3件)
施設関係者	・施設利用者も楽しい時間を共有できた
	・地区の成り立ち、「歴史」「民話」「自然学」「漁業・農業・商業」等一生懸命伝えている。これを機会にまたこの地区に来てみようと思ってもらえると幸いと思う

習目標に沿って、自治体における健康福祉ニーズや住民の特徴、保健師が大切にしていることなどを教授していただくように依頼した。学生は事前に自治体HPと教員が提示した資料から、自治体の概要、主な保健福祉活動を調べて実習に臨んだ。主な実習内容は、自治体の健康課題や保健福祉サービスに関するオリエンテーションの他に、特定保健指導・乳幼児健診、介護予防事業の見学、家庭訪問の同行等であった。

実習記録の記述から、自治体の保健師活動から得た学びの内容は、19コードで10のカテゴリに整理された。アセスメントに関する【住民の生活全体の把握】〈対象だけでなく世帯全体を捉えて支援する〉等の【世帯全体・家族機能の把握】、地区活動に関する〈地域の特性と住民の強みを把握する〉等の【地区特性の把握と政策の立案】、活動方法に関しては【住民をつなぐ関係づくり】【法的根拠に基づくPDCAの実施】【住民による主体的な解決能力支援】【起こりうる疾患やリスクの予測と予防】【多職種連携による解決】、活動方針に関して【信頼関係を

基盤にした相談しやすい専門職】【価値観の尊重】が抽出された。(表10)

#### 4. 3 病院医療連携室・医療相談室実習の概要と結果

実習目的は、療養者や家族の多様な保健福祉ニーズを満たすための医療連携室・医療相談室における専門職の役割を学ぶことである。

大学周辺の14医療機関で54名(実習学生の62.8%)の学生が実習を行った。医療機関の機能は、2次救急、3次救急に対応できる急性期病院、回復期リハビリ病棟や療養型病床を有する病院、公立病院など多様で、病床数は110床～約1,000床まで幅広いが、200床前後の病院が多かった。医療連携室・医療相談室の職員構成は、看護師と社会福祉士の両方がいるところ、看護師と事務職、社会福祉士と事務職の組み合わせがあった。学生は2人1グループとなり、医療機関は1か所あたり、1～2グループを担当した。

実習前に教員2名で打ち合わせに伺ったが、看護学生

表8 a地区を担当する保健師の気づき

カテゴリ	記述要約(例)
自分の学生時代の振りかえりができた	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生の考え方や視点を聞いて昔を思い出した</li> <li>・学生時代や初任者の頃の視点を振り返ることができた</li> <li>・カンファレンスの司会を学生が行うのは意見が発表しやすくてよい方法</li> </ul>
住民は保健師に話さない意識や思いを学生に話していることへの気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住民が学生には保健師には話さないような意識や思いを話しているように思う</li> </ul>
学生の聞き取り内容から住民の新たな側面に対する気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保健指導時とは違い漁師がざっくばらんに話をしてくれ、内容も抱いていた印象と違っていた</li> <li>・学生の聞き取り結果は、違う視点から気づきを得られる</li> </ul>
自分が健康な人の生活が見えていないことへの気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポピュレーション活動が十分でなく、健康な人の生活状況が見えない</li> </ul>
地区に行き、歩くことがなかったことへの気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分から地区に行くことがない</li> <li>・普段車で行くので地区を歩かない</li> <li>・地区を歩くこと違う視点で見えるのかと思った。学生時代はこんな実習がなく、いいなと思った</li> <li>・普段合わないので、漁師に聞きたいことを聞いた</li> </ul>
新しい考え方を取り入れ地区活動に取り組んでも良い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長く活動していると停滞するので新しい考え方についてやってみようかと</li> </ul>
学生に教えることが住民の自助、セルフケア力向上につながっていることへの気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・住民が学生には教えてあげようとしている</li> <li>・学生に話をすることが住民の自助につながってくるのではないかと</li> <li>・住民も訪問により自分の健康を考える機会になる</li> </ul>
大学と市と住民が連携することで学生の学びが深まる実習の意義	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生は市の保健師と住民との接着剤のような立場</li> <li>・住民も学生との交流や学校に期待しているので、健康に関して何かできるとよい</li> <li>・お互いに連携し学生の学びが深まれば意義のあること</li> <li>・今年の経験からこの地区でも可能</li> <li>・数年同じ地区で行うことで地区が健康で活性化する</li> </ul>
他の地区でも取り組むことで市全体のことがわかる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・訪問結果から地区のことがわかるので他地区でもやってもらったほうがいいのか</li> <li>・いろいろな地区で取組み、市全体のことがわかればよい</li> <li>・この地区ですでればほかの地区にも広がり、課に大きなメリットになる</li> <li>・大学と住民の取組みに行政も入ったほうが良いが、内容は考えないと難しい</li> </ul>
学生の力を借りて担当地区を見直し活動方針を考えるきっかけになるとよい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・担当地区を捉えなおし、活動方針を考えるきっかけになったのではないかと</li> <li>・学生の力を借りて自分がやりたいことを創造するのよい</li> <li>・学生の良い所を利用して、何をやるかは地区担当保健師が考えることが良い</li> </ul>
学生の準備状況や個々の特性に対する理解を深める必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1日しか参加せず学生の特徴は判らなかつた</li> <li>・事前に資料をみなかつたので学生の学習状況が分からなかつた</li> </ul>
実習への効果的な保健師の参加方法への改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・緊急ケースにはすぐに対応できるので、毎日のカンファレンスは、実習後のまとめの時でのよい</li> </ul>

の実習を初めて受ける医療機関が多く、実習内容に対する戸惑いが見られた。医療連携室・医療相談室実習から看護職として地域ケアシステムにおける役割を考えると、という実習目標に沿って、医療連携室・相談室や専門職の役割の説明の他に、患者・家族のニーズや介護の現状、地域の社会資源の現状と課題、医療連携室から見た病院看護職、行政保健師等に対する要望について教授していただけるよう依頼した。学生は事前に実習病院の概要と医療連携室・相談室の機能を調べて実習に臨んだ。

実習内容は、医療連携室・医療相談室に関するオリエンテーションの他に、相談への同席や病棟カンファレンス、他の病院との合同カンファレンスの見学など、実際の連携・相談場面が体験できるよう工夫されていた。実

習記録の記述から23コードから7カテゴリが抽出された。〈地域の医療機関や施設との連絡、調整等を行うことで病院自体が機能していく〉〈患者と家族、病院間に隔たりが出ないようにつなぎ、患者の権利を守る〉等の【医療連携室の重要性の高まり】、〈患者、家族の意向に沿って、制度やサービスを患者が選択できるように説明すること〉等の【患者・家族の意向の把握】、〈医療問題、介護問題、社会的問題、生活環境問題の解決を図っており、看護師とMSWなど他職種が連携している〉等の【総合的な問題解決】、〈多職種と連携するにはチームワークが大切、それぞれの専門職の視点で問題を把握し、意見交換して統一させること〉等の【効果的なカンファレンスの運営】、〈SWの役割は患者の心理的側面や日常生活

表9 市町村ごとの実習日程と方法

自治体	総人口概数 (H28: 人)	学生数	実習期間(4日間)の学生受け入れ方法
A	65,000	18	初日18名、2日目から4日目まで6名ずつ
B	67,000	16	1日4名で4日間
C	38,000	14	1日2～4名で4日間
D	24,000	8	1日4名2日間実習を2クール
E	14,000	6	初日6名、2日目から4日目まで2名ずつ
F	30,000	6	初日6名、2日目から4日目まで2名ずつ
G	95,000	12	初日12名、2日目から4日目まで4名ずつ
H	80,000	6	6名、2日間

表10 市町村における公衆衛生看護活動で学んだこと

カテゴリ	記述要約(例)
住民の生活全体の把握	住民の生活全体を捉える
世帯全体・家族機能の把握	対象だけでなく世帯全体を捉えて支援する 家族機能にも着目して支援する
地区特性の把握と対策の立案	地域の特性と住民の強みと課題を把握する 地域の特性に併せて顕在化している問題の共通性をみつける
法的根拠に基づくPDCAの実行	地域特性や健康課題を分析して計画を立て、実施、評価する 健康課題を明確にし、法的根拠にもとづいて市町村独自の計画を策定する
住民による主体的な解決能力向上支援	健康の自己管理能力を高める 住民が主体的に学習に取り組める工夫をする 住民が継続的に健康づくりに取り組めるようサポートする
住民をつなぐ関係づくり	住民同士の顔が見える関係をつくる
起こりうる疾患やリスクの予測と予防	健診は入り口でその後の支援が大切 病気を予防すること 起こるリスクを予測して対処する
多職種連携による解決	様々な職種が連携する 関連部署と連携して問題の解決を図る
信頼関係を基盤にした相談しやすい専門職	住民との信頼関係が大切 市町村の保健師は住民との距離が近く気軽に相談できる専門職
価値観の尊重	本人の価値観を尊重する

支援に特化している〉等の【職員・専門職の役割分担】、〈医師・看護師がベッドサイドで聞いた情報とSWが把握した情報の共有が大切〉等の【看護師からの情報提供の重要性】、〈1日1回は病棟に行き、顔の見える関係づくりを重視している〉という【顔の見える関係づくり】という学びが得られた。(表11)

#### 4. 4 居宅介護支援事業所実習の概要と結果

実習目的は、地域で要介護者と家族の療養生活や健康を支える介護支援専門員の役割を学ぶことと、地域で生活する要介護者と家族が介護や健康についてどのように対処しているのかを学ぶことである。実習内容では、介護支援専門員が要介護者と家族の支援及びチームアプローチで大切にしていることの説明を受けること、介護支援専門員のコミュニケーションの取り方、具体的な支援内容を学ぶことを課した。学生は、事前演習と学内実習で介護保険制度とケアマネジメントを学習して臨んだ。

大学が所在するA市内の19事業所で62名(実習学生の72.1%)の学生が実習を行った。居宅介護支援事業所

の規模は、介護支援専門員1名～7名であった。学生2名1グループになり、1事業所1～2グループの実習を引き受けてくれた。

実習前の打ち合わせは、大学で合同会議を開催し、全事業所が参加した。参加者からは、「看護学生であることから同行訪問する事例の介護度や認知症の有無、訪問看護サービス利用の有無などを考慮したほうが良いか」という質問が多く挙げられた。教員からは、特に対象者の条件はないこと、利用者の同意が原則である事を伝えた。

実習では、モニタリング訪問への同行、担当者会議への参加、訪問診療や訪問リハビリの見学、通所サービス事業所への同行など1日に複数の活動を見学していた。実習記録から、35コード得られ、14カテゴリが抽出された。チームを組む専門職や本人・家族との【基本は信頼関係】、〈本人の希望とニーズは異なることがわかった〉等の【利用者の意向、主体性の尊重とニーズ重視】、〈本人の望むQOLの向上を目指す〉等の【目標は本人が望むQOL】、〈自分でできることはやってもらう〉等の【自立支援・セルフケア支援】、〈利用者・家族・看護師・ヘル

表11 病院の医療連携室・医療相談室実習から学んだこと

カテゴリ	記述要約(例)
医療連携室の重要性の高まり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・診療報酬の改訂により早期退院支援が強化され、一層多職種連携が重要となる</li> <li>・入院期間の短縮が求められるなか、医療連携室の役割が重要</li> <li>・地域の医療機関や施設との連絡、調整等を行うことで病院自体が機能していく</li> <li>・入退院が円滑に行くように、地域の病院や施設とつなぐ役割がある</li> <li>・患者と家族、病院間に隔たりが出ないようにつなぎ、患者の権利を守る</li> </ul>
患者・家族の意向の把握	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本人の意思・家族の意向を知ることが大切</li> <li>・患者、家族の意向に沿って、制度やサービスを患者が選択できるように説明すること</li> <li>・患者家族の支援が重要で、多職種が家族の考え方に合わせた支援を行うこと</li> </ul>
総合的な問題解決	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体的、経済的、希望的側面などあらゆる点から患者にあわせたサービスが紹介できるようにしている</li> <li>・医療問題、介護問題、社会的問題、生活環境問題の解決を図っており、看護師とMSWなど多職種が連携している</li> <li>・生活保護受給者や身寄りのない人の金銭管理支援や生活用品の購入など多様な活動をしている</li> </ul>
効果的なカンファレンスの運営	<ul style="list-style-type: none"> <li>・病棟カンファレンスでは、患者を生活者として支援するために、多職種が共通の目標を持ち連携することが大切</li> <li>・多職種と連携するにはチームワークが大切、それぞれの専門職の視点で問題を把握し、意見交換して統一させること</li> </ul>
職員・専門職の役割分担	<ul style="list-style-type: none"> <li>・SWの役割は患者の心理的側面や日常生活支援に特化している。</li> <li>・SWは患者と家族、医師や看護師、理学療法士などお互いの関係をつなぐ役割がある</li> <li>・医療事務とSWの役割分担により、入退院の円滑化と効率化が図られる</li> </ul>
看護師からの情報提供の重要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>・退院支援室の看護師は、患者家族の情報を収集し退院指導を行う</li> <li>・看護師は入院時から多職種と連携して、退院支援計画を立て自宅や施設にむけた指導を行うことが重要</li> <li>・退院後の生活の選択にあたり、社会資源の情報提供が大切で、看護師も制度や資源を理解しておく必要がある</li> <li>・医師・看護師がベッドサイドで聞いた情報とSWが把握した情報の共有が大切</li> <li>・看護師は病棟や外来で情報を収集し、経済的困窮者や独居で身寄りのない人でも安心して在宅生活ができるよう多職種と連携し支援していた</li> <li>・看護師は他職種に患者の情報や要望を分かりやすく伝えることが重要</li> </ul>
顔の見える関係づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1日1回は病棟に行き、顔の見える関係づくりを重視している</li> </ul>

パーの情報から、本人に適したサービスを判断する〉等の【多角的・総合的なアセスメント】、〈利用者の良い点を見つけ、ケアプランに取り入れたり、関係者と共有する〉等の【ストレングスの活用】、〈転倒リスクを予測し安全確保のために環境整備を行う〉等の【予測と予防】、〈本人のニーズに基づいて家族に伝える〉【代弁役割】、〈家族にも本人の状態やケアの方向性を伝えていく〉等の【家族支援】、〈すぐに足を運ぶ、すぐに電話をすること〉等の【きめ細かいモニタリングと対応】、〈本人の持つ力を生かすためには多職種との連携が重要〉等の【多職種の連携と調整】、〈地域との交流をつなぐ役割〉等の【地域への働きかけ】、〈莫大なサービス費用を動かすので、自立支援のために使うよう財政面も考慮する〉という【社会保障費を考慮した支援】、〈自己負担を考慮したサービス利用〉という【経済力への配慮】を学んでいた。(表12)

事業所には実習終了後、学生の実習記録と一緒に無記名アンケートを送付し、20名から返送があった。学生

の実習前の準備状況、実習態度や学び、教員との連携について概ね問題はなかったが、事前学習やコミュニケーション技術が不十分な学生がいたこと、実習目的の共有や実習方法の情報交換の必要があること、在宅生活を理解することも大切なので今後も実施してもらいたい等の意見が挙げられていた。(表13)

## 5. 考察

### 5.1 実習目標の達成度に関して

学生の記録から得られたデータをもとに、6項目の実習目標が達成されているかを検討し、「学士課程においてコアとなる看護実践能力」から考察した。

**目標1** 実習地における保健福祉ニーズを把握し説明できる

訪問実習により学生は、塩分の摂取量が多い食生活や坂の多い地区での転倒・閉じこもりリスクなど、訪問家庭や地域環境における保健福祉ニーズを把握し、実習記

表12 居宅介護支援事業所実習から学んだこと

カテゴリ	記述要約(例)
基本は信頼関係	・チームアプローチで大切なことはお互いの信頼関係 ・在宅では、まず利用者・家族との信頼関係を構築する必要がある
利用者の意向、主体性の尊重とニーズ重視	・本人や家族の意向を尊重してケアプランを作成する ・選択肢を提供し自己決定してもらうことで利用者本位のサービスが提供できる ・本人の希望とニーズは異なることが分かった
目標は本人が望むQOL	・本人の望むQOLの向上を目指す ・その人らしさを尊重する ・本人が何ができるかではなく、何を指望すかを大切に目標にする
自立支援・セルフケア支援	・残存能力を最大限生かすために生活環境を整えて見守る ・自分でできることはやってみよう ・サービスに依存しないようにする
多角的・総合的なアセスメント	・利用者・家族・看護師・ヘルパーの情報から、本人に適したサービスを判断する ・身体面だけでなく、言葉や表情から心理面も把握する ・サービス提供現場に直接行き、情報を収集する ・本人の話だけでなく、自分の目で見て確認することが大切 ・利用者の価値観や全体像をとらえるためには生活歴を理解することが重要
ストレングスの活用	・意欲を高めるために趣味や生活歴を把握することが重要 ・利用者の良い点を見つけ、ケアプランに取り入れたり、関係者と共有する
予測と予防	・先々の状態を見据えてケアプランを立てている ・転倒リスクを予測し安全確保のために環境整備を行なう ・詐欺などに合わないようヘルパーと連携して見守る
代弁役割	・本人のニーズに基づいて家族に伝える代弁者の役割を果たす
家族支援	・介護家族の存在が大きいと家族の健康が重要 ・家族ができること、できないことを把握し、社会資源を最大限に活かす ・家族にも本人の状態やケアの方向性を伝えていく
きめ細かいモニタリングと対応	・利用者に合わせた方法で臨機応変に判断し、対応して行くことが大切 ・すぐに足を運ぶこと、すぐに電話をすること
多職種との連携と調整	・関係者が話し合い、目標や情報を共有できるようにすることが大切 ・サービス事業所の考え、価値観、プライドに配慮する ・本人の持つ力を生かすためには多職種との連携が重要 ・自分1人で抱え込まず、自分にできないことを明確にする。
地域への働きかけ	・高齢者見守りのための地域連携システムをつくる ・地域との交流をつなぐ役割
社会保障費を考慮した支援 経済力への配慮	・莫大なサービス費用を動かすので、自立支援のために使うよう財政面も考慮する ・自己負担を考慮したサービス利用

録に記述できていた。居宅介護支援事業所実習では、本人の希望と介護支援専門員が判断している自立に向けたニーズが異なることがあることを学び、要介護者に対する自立支援ニーズを理解していた。

**目標2)** 地域で生活している人々が、どのように健康や病気を捉え、対処しているのか説明できる

訪問実習により、住民は自分なりに学習して行動していたり、住民の健康意識が高く、適切な健康管理行動を遂行している事例、健診の必要性を感じずに受けない事例、不適切な自己管理方法をとっている住民などを把握できていた。

**目標3)** 実習地における保健福祉活動の目的と概要を説明できる

市町村実習、病院実習、居宅介護支援事業所実習において、表10,11,12からそれぞれの施設の目的や機能を把握できたと考える。

**目標4)** 保健福祉活動において活用されている社会資源の種類と利用上の課題を把握し、説明できる

訪問実習における記述内容から、医療機関やスーパーなどの社会資源が少ないことによる課題があることを学んでいることがわかった。居宅介護支援事業所実習記録から、サービス利用には自己負担を考慮する必要性があるという利用上の留意点に関する記述があった。看護職として社会資源の知識を持ち、情報を対象者に提供することの重要性の記述はあったが、利用上の課題の記載は十分ではなかった。

表13 居宅介護支援事業所からのアンケート結果

アンケート回収数 20名（1事業所で複数の介護支援専門員の記入あり）

<b>問1 学生の実習前の準備について</b>	
十分であった	12(60%)
不十分であった	2(10%)
無記入	6(30%)
自由記載(抜粋)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・「チームアプローチ」「モニタリング」等知識をもっていた。全て把握することは難しいと思うが、実際の現場での違いを感じてくれていたように思う。</li> <li>・事前に最低限の事は勉強されており、スムーズに導入できた。とてもよく学ばれていると感じた</li> <li>・ケアマネは分かりにくい仕事であるが、看護・医療から在宅に向けた必要性が高くなっている仕事であり、前向きでよかった</li> <li>・CMの業務は時期により業務内容が違う為、実習に入る前にCM業務の月の流れが把握できればよりスムーズに実習が行えるのではないかと。</li> <li>・初歩的なことがわかっていない様に思った。実習前に自己学習した内容を見せてもらえると学生の土台がわかるのでお願いしたい</li> </ul>	
<b>問2 学生の実習態度や実習での学びについて</b>	
問題はなかった	16(80%)
問題があった	1(5%)
無記入	3(15%)
自由記述(抜粋)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生が利用者や家族に積極的に話しかけ、学ぼうとする意欲が感じられた。</li> <li>・実際に利用者宅へ訪問した際に感じたことを素直に言葉に出来てよかった。</li> <li>・実習態度は問題なかったが、コミュニケーションが上手にとることができなかった。必要なスキルなので事前に技術向上のカリキュラムがあると良い</li> </ul>	
<b>問3 実習の企画・実施面での教員との連携について</b>	
十分であった	14(70%)
不十分であった	2(10%)
無記入	4(20%)
自由記述(抜粋)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習間近での打合せがあった方がよいと思う(間が空きすぎたので)</li> <li>・事前の打合せや実施前後の連絡も頂き、安心できた。</li> <li>・居宅介護支援業務の中のどのような点に重点をおいた実習が望ましいかがあるとよいと感じた。</li> </ul>	
<b>問4 その他、気づいたこと、今後に向けた要望(要約)</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の実習受け入れ施設との情報共有を行う機会があるとよい</li> <li>・大学における実習目的を受け入れ施設と明確に共有する必要がある</li> <li>・事前学習を十分に行ったうえで実習に臨むことが重要である</li> <li>・実習に臨むにあたって基本的なコミュニケーション技術、臨む姿勢の向上を図る必要がある</li> <li>・実習中の事故等に対する大学としての保障体制について受け入れ施設と共有する必要がある</li> <li>・実習を受けたことで自分たちも学びにつながった。看護を学ぶ上で、在宅での生活を理解することも大切なので、今後も実習を続けてもらいたい。</li> </ul>	

**目標5)** 地域の人々に対する保健福祉活動に参加し、公衆衛生看護活動方法を説明できる

市町村実習は1～2日間と短い期間であったが、記述内容から、【地区特性の把握と対策の立案】【法的根拠に基づくPDCAの実行】【住民による主体的な解決能力向上支援】【起こりうる疾患やリスクの予測と予防】など、行政保健師の特徴的な活動を学ぶことができたと考える。

**目標6)** 保健医療福祉システムにおける看護職及び他職種役割や機能を説明できる

学生は、訪問実習から看護職の役割を【対象理解と尊重】【行動継続のための承認と場の提供】【セルフケア方法の指導】【家族指導】【地域課題の把握】【課題解決の方策の提案】等と学んでいた。

病院実習からは、看護職の役割として【看護職からの情報提供の重要性】を学んでおり、ソーシャルワーカー等が【患者や家族の意向を把握】し【総合的な問題解決】を図るために【職員や専門職による役割分担】や【顔の見える関係づくり】を行っていることを学んでいた。居宅介護支援事業所のケアマネジャーは、【多角的・総合的なアセスメント】により【自立支援・セルフケア支援】や【代弁役割】【家族支援】【他職種との連携や調整】などの役割、機能を担っていることを学んでいた。

これらの結果から、学生は概ね実習目標を達成できたと考えられる。

「学士課程においてコアとなる看護実践能力<sup>3)</sup>を参照すると、今回学生が達成できた能力は、II群の7)個人と家族の生活を査定する能力8)地域の特性と健康課題を査定する能力にあたる。特に訪問実習では、学生は坂の多い地域特性を転倒リスクというデメリットと捉えるだけでなく、訪問した住民の話から、筋トレにつながるメリットもあるなど、個人と家族の生活と地域の特性を関連させて査定するとともに、多角的にアセスメントすることができていた<sup>4)</sup>。

牛尾は、学士看護学基礎教育課程における地域診断演習・実習の現状から、「地域診断」の概念を明確にすること、学生のレディネスに着目した情意領域・精神運動領域の教育目標設定を考慮すること、地域診断と計画策定を連動させるプログラムの工夫が必要であると述べている<sup>5)</sup>。これらの実習は、保健師教育と看護師教育を統合した課程を持つ大学での地域看護実習プログラムと思われるので比較はできないが、看護師教育課程の学生にとっても、地区踏査による地域の自然環境・社会環境と健康課題を考える訪問実習は、患者の生活背景の理解を深め、個人への支援能力の向上に貢献すると考える。

また、今後必要な看護師の地域看護能力を提言した地域看護学会教育委員会報告<sup>1)</sup>では、個人と家族の生活を査定する能力の中に「個人・家族の価値観や文化を理解し、生活している人として捉えることができる」を追加

している。地域の歴史資料館での学びや漁協で聞いた漁師の話は、目に見えにくい地域の文化や風土への理解を深めることにつながったと思われる。

地域看護学会教育委員会の提言には、IV群15)「地域ケアシステムの構築・推進と看護機能の充実を図る能力」として(1)「地域の特性と健康課題のアセスメントの結果から、地域で生活するために不足するケア資源を把握し、提案できる」も追加されている。今回の実習ではケア資源のアセスメントは不十分であった。その理由として、看護師教育課程の演習項目に地域診断が含まれていないこと、学内実習時に実習施設周辺のケア資源を把握していなかったことによる学生の知識・技術不足が考えられる。看護師教育課程の学生に対しても地域の医療・介護・福祉資源に関する地域診断方法を教授し、健康課題を解決するために必要なケア資源を提案できる能力を育成する必要がある。

同じ項目に追加されている(3)「地域のケアチームの目的と機能を理解し、地域のネットワークの必要性や形成のための方法を説明できる」(4)地域ケアに携わる関係者の役割を理解できる」については育成できたと考える。これらのことから、新たに求められている看護基礎教育で習得すべき看護師の地域看護の能力の一部についても効果がある実習プログラムであったと考える。

## 5.2 地域との共生を基盤とした実習プログラム開発の観点から

訪問実習は、町内会や民生委員会、地域住民、地域の社会施設の協力があって初めて可能になった実習であった。その結果、住民自身には「地域や健康を振り返る機会になった」ことや「学生との対話が楽しかった」という満足感があり、自治体保健師は「住民の新たな側面に対する気づき」や「自分が健康な人の生活が見えていないことへの気づき」などが得られる等、学生・住民の双方により成果が生まれていた<sup>6)</sup>。

実習後のアンケートでは、「町内総会等で健康について学生達の話の聞ける機会を設けてはどうか」という提案や「学生が日常的に住民とフランクな付き合いができるとよい」など、継続した関わりを求める声もあった。こうした要望に応えることは、実習で得られた地域住民との関係をさらに強固なものにし、継続した実習フィールドの確保につながると思われるため、方法を考える必要がある。演習の活用、学生による地域行事への参加などのボランティア活動、教員の研究フィールドなどを検討したい。

米国では、公衆衛生スキルを持つ看護師の需要の拡大を背景に、population(人口集団)を対象にしたアプローチを重視し、教区コミュニティや、障害者・貧困対象者の地域施設などのフィールドとのパートナーシップモ

デルによる実習プログラムが行われている<sup>7)</sup>。米国のプログラムでは、学生が対象コミュニティに対し既存の公衆衛生プログラムの参加や地区診断と診断に基づくプログラムの企画実践を行っており、本学の保健師教育課程の公衆衛生看護学実習Ⅲに該当する内容であった。

実習Ⅰの訪問実習は、米国の実習プログラムの地区診断の最初の部分に当たると考えられる。米国のように地区診断に基づくプログラムを企画し実践するには、本実習で学生が把握した地域の健康課題を住民と共有し、解決に向けた計画書を作成しケアの実践を行なう必要があるが、日本の看護師教育課程における教育内容は、そうした実践能力の修得を目標にしていない。これから必要とされる看護師の地域看護能力を見直した地域看護学会教育委員会報告<sup>1)</sup>には、「地域における人々の力を把握し、人々とともに健康・生活上の問題を共有し、解決に向けて協働する必要性や方法を理解できる能力」が記載されているが、到達レベルは「理解できる」である。

そこで、地区担当保健師が実習後のインタビューで「学生の力を借りて担当地区を見直し活動方針を考えるきっかけになるとよい」「新しい考え方を取り入れ地区活動に取り組んでもよい」と語っていることから、保健師教育課程の実習Ⅲに、地域住民や地区担当保健師との協働による地区活動を取り入れる方法を検討する必要があると考える。そこからさらに、地域との共生を基盤にした実習プログラムの在り方を追究していきたい。

## 6. まとめ

看護師教育課程における地域看護実習プログラムを考察し、学生の実習記録や関係者のアンケート等から評価を行なった。家庭訪問・地区踏査実習、市町村実習、病院医療連携室・医療相談実習、居宅介護支援事業所実習を組み合わせた実習Ⅰのプログラムは、地域包括ケア時代を担う看護師に必要な、個人・家族と地域の健康課題をアセスメントする能力の育成、地域ケアにおける関係者の役割を理解し、多職種連携における看護師の役割の考察に繋がったといえる。

訪問実習は、地域住民・関係者と大学の双方に利点のあるプログラムであったが、実習期間以外にも地域との交流を持つ必要があることが示唆された。

訪問実習で把握した住民の健康課題に対しては、地区担当保健師や地域関係者とともに解決に取り組めるよう保健師教育課程の公衆衛生看護学実習Ⅲの内容を検討する必要があることがわかった。

今回の報告は、日本地域看護学会第20回学術集会で発表した2演題<sup>4)6)</sup>に、他の実習施設での学びを追加したものである。

## 文献

- 1) 村嶋幸代他：日本地域看護学会委員会報告 地域看護に必要な教育内容の明確化－看護基礎教育で修得すべき地域看護能力（コンピテンシー）－, 日本地域看護学会誌, 20(2):102-111, 2017.
- 2) 日本看護系大学協議会HP <http://www.janpu.or.jp/campaign/file/ulist.pdf> (参照2017-09-30)
- 3) 文部科学省: 大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会最終報告. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm) (参照2017-09-30)
- 4) 安藤智子他: 公衆衛生看護学実習Ⅰにおける家庭訪問と地区踏査プログラムの評価～学生の学びから～, 日本地域看護学会第20回学術集会, 別府市2017-08-5/6.
- 5) 牛尾裕子: 学士看護学基礎教育課程における地区診断の演習・実習教育の現状, UH CNAS, RINCP Bulletin Vol.21, 37-49, 2014.
- 6) 岩瀬靖子他: 公衆衛生看護学実習Ⅰにおける家庭訪問と地区踏査プログラムの評価～地域との共生を基盤とした観点から～, 日本地域看護学会第20回学術集会, 別府市, 2017-08-5/6.
- 7) 牛尾裕子他: 米国におけるpopulationに焦点を当てた看護実践の学士課程教育の動向－日本の学士課程における地域・公衆衛生看護学教育への示唆－, UH CNAS, RINCP Bulletin Vol.23, 1-14, 2016.
- 8) 菅原京子他: 地域看護診断を主要な目標とする実習の教育方法の検討, Yamagata Journal of Health Science, Vol.6, 69-83, 2003.
- 9) 清水美代子他: フィールドワークを取り入れた地域診断演習における学生の学び, 日本赤十字豊田大学紀要 10巻1号, 123-134, 2015.
- 10) 大分県立看護科学大学: 平成27年度地(知)の拠点整備事業報告書 看護学生による予防的家庭訪問実習を通じた地域のまちづくり事業, 平成28年6月.